

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19320070

研究課題名（和文） 談話のタイプと文法に関する日英語対照言語学的研究

研究課題名（英文） Japanese-English Contrastive Linguistic Research on the Relation between Discourse Types and Grammar

研究代表者

廣瀬 幸生（HIROSE YUKIO）

筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・教授

研究者番号：00181214

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本語と英語の対照言語学的研究を通して、談話がどのようなタイプで、どのような内部構成をしているかという談話的要因によって、日英語の文法がどのような影響を受けるかを考察した。特に、(1) 談話のタイプが異なると、文法のどのような部分が影響を受けるか、(2) 文法に影響を与える談話のタイプを特徴づける主な認知的要因は何か、(3) 談話のタイプが変わることで影響を受ける文法の部分は日英語でどのように異なるかを示した。

研究成果の概要（英文）： Through a contrastive linguistic study of Japanese and English, we investigated how Japanese and English grammar are affected by discourse factors related to the type of discourse and its internal structure. In particular, we showed (1) what parts of grammar are affected by different discourse types, (2) what major cognitive factors characterize the discourse types affecting grammar, and (3) how Japanese and English vary as to the parts of grammar affected by different discourse types.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	2,300,000	690,000	2,990,000
年度			
総計	7,800,000	2,340,000	10,140,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：談話、文法、対照言語学、機能、形式

1. 研究開始当初の背景

従来の典型的な文法観では、母語話者の文法・言語知識は、生得的な普遍文法を仮定するとはいえ、話し手と聞き手との日常的な対話に基づいて形成され、そのようにして獲得された文法は画一的で安定したものである

という見方が強かった。しかしながら、近年、機能主義の言語学や認知言語学で「使用基盤モデル」という考え方が出され、実際の言語使用では、文法はコンテクストに応じて流動的に変化しうるものであり、決して画一的に安定したものではないという文法観も唱え

られるようになってきた。

このような状況において特に重要であるのは、文法のどの部分が言語使用からどのような影響を受けやすく、またどの部分が影響を受けにくいかを、具体的な言語データに即して実証的・体系的に研究することである。その一つの方法として、談話をその目的と機能に応じていくつかのタイプに分類し、異なるタイプの談話において、文法のどの部分が可変的になりうるか、あるいは不変的であるのかを明らかにしようとするのが本研究の大きな目的である。さらに、それを日本語と英語という系統的に異なる二つの言語を比較対照して行うことで、談話のタイプと文法の相関関係に関する言語類型論的意味合いを追究することも目指すものである。

2. 研究の目的

本研究は、談話がどのようなタイプでどのような内部構成をしているかという談話的要因と、文の産出・解釈にかかわる文法の間でどのような関係があるかを、日英語を比較対照しながら考察することを目的とする。その際、主に、次の4点に焦点をあてる。

(1) 文法の少なくともある部分に影響を与えると考えられる談話のタイプにはどのようなものがあり、そのタイプはどのように特徴づけられるか。

(2) 談話のタイプが変わることで影響を受ける文法の部分はどのようなものであり、どうしてその部分は談話からの影響を受けるのか。

(3) 談話のタイプが変わっても影響を受けない文法の部分はどのようなものであり、どうしてその部分は談話からの影響を受けないのか。

(4) 談話のタイプが変わることで影響を受ける文法の部分は、たとえば日本語と英語のように、言語が異なれば異なるのか。

3. 研究の方法

談話のタイプと文法の関係にアプローチする研究単位として、主に、次の4つを中心に研究を進める。

(1) 談話のタイプと主観的表現の文法に関する日英語対照研究 (担当: 廣瀬幸生)。

(2) 談話のタイプと時制・アスペクトに関する日英語対照研究 (担当: 和田尚明)。

(3) 談話のタイプと倒置文・否定・情報構造に関する日英語対照研究 (担当: 加賀信広)。

(4) 談話のタイプと述語の照応・削除に関する日英語対照研究 (担当: 島田雅晴)。

これ以外にも、関連する現象の考察・検討なども随時行う。上記研究単位のうち、(1)と(2)は認知意味論、機能論、語用論の視座を重視し、一方、(3)と(4)は生成統語論および形態統語論の視座を重視する。この役割分担に

よって、意味と形式のバランスのとれた研究を目指す。

4. 研究成果

(1) 談話と文法に関する日英語対照研究にとって重要となる観点の一つは、言語使用者としての「話し手」を、伝達の主体としての「公的自己」と思考・意識の主体としての「私的自己」という二つの側面に解体し、日本語は私的自己中心の言語、英語は公的自己中心の言語と捉える見方である。公的自己・私的自己は「公的表現・私的表現」という異なるレベルの言語表現の主体と特徴づけられる。公的表現とは、言語の伝達的機能に対応する言語表現のレベルで、一方、私的表現とは、伝達を目的としない、言語の思考表現機能に対応する言語表現のレベルである。公的表現と私的表現の根本的な違いは、前者は聞き手の存在を前提とするが、後者は前提としないということである。

(2) 公的自己が問題となる談話のタイプ (典型的には会話、報告文、手紙など) と私的自己が問題となる談話のタイプ (小説における心理描写、日記文、独り言など) では、主観的表現の分布とその解釈に関わる文法が異なる。そして、これらの談話タイプの違いには、言語表現の「公的性の度合い」、つまり、話し手が他者を意識する度合いが重要な役割を果たす。

(3) 時制やアスペクトの解釈に関しても、公的自己・私的自己の違いが関与するとともに、当該談話において、状況内の「ウチの視点」をとるか、状況外の「ソトの視点」をとるかの違いが重要であり、日英語の文法はこの違いに対応して解釈できる柔軟なシステムを備えていなければならない。

(4) 従来、談話の影響を受けて語用論的に容認されると言われてきた諸構文 (受動構文や二重目的語構文など) について、生成統語論および形態統語論の観点から見直しを行うと、談話の影響を受けているのは主に意味役割の読み換え部分であり、その部分を除けば、項構造に関する基本的文法は談話の影響を受けないと考えられる。

(5) 英語が公的自己中心ということは、英語では公的自己による聞き手への伝達が重視されるということであり、それに対し、日本語が私的自己中心ということは、他者への伝達よりは、私的自己の意識の表現のほうに重きが置かれるということである。この言語的性格の違いが日英語における談話と文法の関係にもかかわる。したがって、日英語では、談話のタイプが変わることで影響を受ける文法の部分は異なることになる。私的自己中心の日本語では、逆に公的自己が関わる談話でより有標的な言語形式の使用が加わり、一方、公的自己中心の英語では、私的自己が

関わる談話で有標的な省略現象や言語形式の有標的な解釈が生じる。

(6) 談話のタイプと文法の相関関係に重きを置いた日英語対照研究はこれまでにほとんどなく、その意味で文法と言語使用の関係に新たな見方を提示することができた。特に、「日本語は私的自己中心、英語は公的自己中心」という考え方は、日英語の言語文化論にまで発展し、日本語が英語に比べ自己志向性の強い言語であることを示すとともに、日本語から見た日本人は、個としての自己意識が強く、そのためにかえって対人関係に敏感になるという逆説的二面性があることを明らかにした。

(7) 研究成果の一部を比較的入手しやすい本の形(『日本語から見た日本人—主体性の言語学—』2010年、『「内」と「外」の言語学』2009年)で出版できたこと、ならびに、英文の研究書(*Distinctions in English Grammar*, 2010年、*Thematic Structure: A Theory of Argument Linking and Comparative Syntax*, 2007年)の出版により研究成果の一部を海外に向けて発信できたことも、有意義であった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 25 件)

- ① Hirose, Yukio, “Constructions of Degree Modification in English and Japanese: A Semantic Functional Analysis,” *Tsukuba English Studies* 29, 1-19, 2011. 査読有
- ② Shimada, Masaharu, “Restrictive and Non-restrictive Subordination,” 『外国語教育論集』 33, 51-58, 2011. 査読有
- ③ Shimada, Masaharu, and Akiko Nagano, “Zi-nouns in Japanese and Related Issues,” 『文藝言語研究・言語篇』 59, 75-106, 2011. 査読有
- ④ Shimada, Masaharu, and Akiko Nagano, “A Note on Affixal and Non-affixal Anaphors in Japanese,” *Linguistic Theories and Their Application* (CD-ROM 版), 2011. 査読有
- ⑤ Naoaki, Wada, “On the Mechanism of Temporal Interpretation of Will-Sentences,” *Tsukuba English Studies* 29, 37-61, 2011. 査読有
- ⑥ Nagano, Akiko and Masaharu Shimada, “English [V-A]_v Forms and the Interaction between Morphology and Syntax,” On-Line Proceedings of the Seventh Mediterranean Morphology Meeting, 78-97, 2010. 査読有

⑦ Naoaki, Wada, “On the Distinction of English Past Tenses,” *Distinctions in English Grammar, Offered to Renaat Declerck*, 42-71, 2010. 査読有

⑧ 和田尚明 「現在完了形の表す意味範囲の変遷と C-牽引：英蘭語比較研究」『文藝言語研究：言語篇』 58, 75-112, 2010. 査読有

⑨ Shimada, Masaharu, “Differences between Rational Clauses and Purpose Clauses in English,” 『文藝・言語研究 言語篇』 57, 43-60, 2010. 査読有

⑩ 廣瀬幸生 「話者指示性と視点と対比—日英語再帰代名詞の意味拡張の仕組み—」『「内」と「外」の言語学』 147-173, 2009. 査読有

⑪ 和田尚明 「「内」の視点・「外」の視点と時制現象」『「内」と「外」の言語学』 249-295, 2009. 査読有

⑫ Wada, Naoaki, “The Present Progressive with Future Time Reference vs. *Be Going To*: Is Doc Brown Going Back to the Future Because He Is Going to Reconstruct It?” *English Linguistics* 26, 96-131, 2009. 査読有

⑬ 廣瀬幸生 「再帰代名詞の意味拡張について—日英語対照研究—」『言語記述と言語教育の相互活性化のための日本語・中国語・韓国語対照研究』 187-209, 2008. 査読無

⑭ 廣瀬幸生 「話者指示性と視点階層」『ことばのダイナミズム』 261-276, 2008. 査読有

⑮ Shimada, Masaharu, “WH-Movement and Linguistic Theory,” *English Linguistics* 25, 519-540, 2008. 査読有

⑯ 和田尚明 「公的自己中心性の度合いと西欧諸語の法・時制現象の相違」『ことばのダイナミズム』 277-294, 2008. 査読有

⑰ 廣瀬幸生 「再帰代名詞の視点的用法と人称の非対称性」『英語青年』 152, 650-652, 2007. 査読無

⑱ 廣瀬幸生 「ダイクシスの中心をなす日本的自己」『言語』 38, 74-81, 2007. 査読無

⑲ Kaga, Nobuhiro, “Syntactic Categories and the Autonomy Thesis,” *English Linguistics* 24, 137-161, 2007. 査読有

⑳ 加賀信広 「結果構文と類型論パラメータ」『結果構文研究の新視点』 177-215, 2007. 査読無

和田尚明 「「内」の視点と時制現象：日英語対照研究」『文藝言語研究 言語篇』 52, 93-149, 2007. 査読無

[学会発表] (計 18 件)

① 廣瀬幸生 「言語研究から見た日本人論—主体性の言語学に向けて—」中右実先生御退休記念シンポジウム「明日の言語研究に向け

て」、2011.2.12、麗澤大学

② 和田尚明 「Will-文の時間解釈のメカニズム」山口大学英語学研究会、2011.1.21、山口大学

③ Shimada, Masaharu and Akiko Nagano, “A Note on Affixal and Non-affixal Anaphors in Japanese,” The 2011 Winter International Conference on Linguistics in Seoul (WICLIS-2011), 2011.1.5, 高麗大学 (大韓民国)

④ 和田尚明 「日英語時制現象の対照言語学的分析」日本フランス語学会、2010.11.13、京都大学

⑤ 廣瀬幸生 「公的自己・私的自己の観点と主体性の度合い—言語使用の三層モデル—」日本英文学会中部支部第 62 回大会シンポジウム「ラネカー視点構図の射程」、2010.10.7、金沢大学角間キャンパス

⑥ 廣瀬幸生 「話者指示性と視点と対比—日英語再帰代名詞の意味拡張の仕組み—」麗澤大学英米文化研究会第 16 回年次記念講演会、2010.6.26、麗澤大学

⑦ 廣瀬幸生 「日本語における個の主体性—言語学からの日本人論再考」高麗大学校日本研究センター特別講演、2010.5.26、高麗大学 (大韓民国)

⑧ Nagano, Akiko and Masaharu Shimada, “On the Category-Changing Prefixation in English,” The 14th International Morphology Meeting, 2010.5.14, ブダペスト (ハンガリー共和国)

⑨ 和田尚明 “On Declerck’s Distinction between Absolute and Relative Past Tenses: Homophonous or Polysemous?” 山口大学英語学研究会、2009.9.17、山口大学

⑩ Nagano, Akiko and Masaharu Shimada, “English [V-A]v Forms and the Interaction between Morphology and Syntax,” The Seventh Mediterranean Morphology Meeting, 2009.9.12, キプロス大学 (キプロス共和国)

⑪ 和田尚明 “A Contrastive Study of Differences in Choosing and Interpreting Japanese and English Tense Forms,” 山口大学英語学研究会、2009.1.21、山口大学

⑫ 廣瀬幸生 「再帰代名詞の意味拡張について—日英語対照研究—」中部言語学会第 54 回研究会、2008.12.13、静岡県立大学

⑬ 長野明子・島田雅晴 「英語の語形成と V-A 型の結果表現」日本言語学会第 137 回大会、2008.11.29、金沢大学角間キャンパス

⑭ 廣瀬幸生 「話し手の解体と主体化・客体化—日英語対照研究の観点から—」日本語文法学会第 9 回大会、2008.10.18、甲南大学

⑮ 加賀信広 「文法の考え方—語法研究の事例を通して—」筑波英語教育学会シンポジウム、2008.6.21、筑波大学

⑯ 廣瀬幸生 「話者指示性と視点階層」「言語のダイナミズム」プロジェクト第 5 回研究会、2007.6.9、成蹊大学

〔図書〕 (計 4 件)

① Bert Cappelle and Naoaki Wada (eds.), *Distinctions in English Grammar, Offered to Renaat Declerck* Kaitakusha, 2010, 361pp.

② 廣瀬幸生、長谷川葉子『日本語から見た日本人—主体性の言語学—』開拓社、2010、224 頁

③ 坪本篤朗、早瀬尚子、和田尚明 (編)『「内」と「外」の言語学』開拓社、2009、430 頁

④ Kaga, Nobuhiro, *Thematic Structure: A Theory of Argument Linking and Comparative Syntax*, Kaitakusha, 2007, 294pp.

〔その他〕

「談話のタイプと文法に関する日英語対照言語学的研究」の<研究の要約とサンプルデータ>集を作成。筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻英語学領域、2011 年 4 月。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

廣瀬 幸生 (HIROSE YUKIO)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授
研究者番号：00181214

(2) 研究分担者

加賀 信広 (KAGA NOBUHIRO)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授
研究者番号：20185705

島田 雅晴 (SHIMADA MASAHARU)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：30254890

和田 尚明 (WADA NAOAKI)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：40282264